

岡山県郷土文化財団

クラシック コンサート

ゲスト：團 伊玖磨

指揮：菊池 東

2000年

10 / 8 日

●開場
13:30

●開演
14:00

高梁総合文化会館

主催：岡山県郷土文化財団・高梁市・高梁市教育委員会・高梁総合文化会館

後援：高梁市文化協会・山陽新聞社

1. スッペ作曲(1819~1895) 喜歌劇「軽騎兵」序曲

スッペは、オーストリアの喜歌劇や通俗曲の作曲家として活躍し、明快な旋律と軽快なリズムで広く知られている。

この喜歌劇「軽騎兵」は、1866年3月に初演され、台本はウィーンの詩人カール・コスタ作で、ハンガリーの舞曲チャルダッシュなどを用いた、華やかな軍人生活の物語である。

この序曲は劇中の主な旋律を中心に構成されており、曲は勇ましい軽騎兵の颯爽とした姿を暗示するトランペットとホルンの演奏によって始まる。

2. ベートーヴェン作曲(1770~1827) 交響曲第5番ハ短調「運命」

ベートーヴェンの弟子であり、晩年のベートーヴェンに仕えたシントラーによると、ベートーヴェンはこの曲の第一楽章冒頭を指して「このように運命は戸をたたく」と言ったという。この交響曲が「運命」と名付けられたのは、ここに由来する。

当時ベートーヴェンは、作曲家としては致命的な耳の病におかされ、そのうえに失恋の痛みも加わり、死を考へて遺書まで書いた。しかし、強靱な意志によってその苦悩を克服し、中期の充実した作品群を書き上げた。交響曲第5番は、それらの作品群の頂点に立ち、ベートーヴェンの生きざまを象徴するような曲である。

休憩

3. 團伊玖磨作曲(1924~) 管弦楽のための「祝典曲」

この作品は1990年5月に、大阪センチュリー交響楽団によって初演され、その後も中国の大連をはじめ、多くの都市で演奏されている。

現在では1959年の「祝典曲」と1993年の「新祝典行進曲」とともに、團伊玖磨の“祝典三部作”として親しまれている。

曲はソナタ形式で書かれ、トランペットのファンファーレが加わり、華やかさと喜びの中に、團伊玖磨特有の気品が輝く作品である。

4. 團伊玖磨作曲(1924～) 管弦楽のための「高梁川」

中国山脈に源を發して、新見・高梁・総社・倉敷を経て水島灘へ注ぐ高梁川一流域の諸都市の母なる川は、今日も美しく流れている。川は歴史と人々の生活を映しながら、ながい間、流域の人たちの生活の支えもしてきた。

川はあるときはやさしく、時には洪水により人々をおびやかせるもした。しかし、そこに住む人々は高梁川を意識しながら生きてきたと思う。母なる川、それを憶うとき、洪水でさえもが大きな教訓であったのではなかろうか。

倉敷市自主文化事業協会・高梁川流域連盟から作曲依頼を受けて、流域を歩いたとき、まずわたしをとらえたものは、この歴史の深さと川の気品と美しさであった。大きな川は他にもたくさんあるだろう。しかしこれほどまでに美しく、そして人々と密接な関係を持ちつづけたものは、高梁川をおいて他にないと思う。

曲は2つの楽章にわかれている。せせらぎと上流の民謡で始まる第1楽章は、「流れ、歌、踊り」の副題を持つ。備中松山踊りの曲が、処々方々に形をかえながらあらわれ、流れは次第に大きくなって、海へ出る。

第2楽章は「備中子守うた」による変奏を伴う幻想曲である。この旋律は、山田耕筰先生によって「中国地方の子守歌」として紹介され、全国に知られているが、この第2楽章には、本来の旋律をもとに、流域に住む人たちの心と、川を中心に現代に発展する力を画いた。わたし自身感動をもって書きあげたこの曲が、多くの方々の胸に残り、川の流れのように演奏され愛されることを祈ってやまない。

團 伊 玖 磨

昭和13(1938)年頃から、作曲を初めて60年を越える歳月が流れました。歳月は愛別離苦の集積の中を、時が無機的に劈きながら去って行ったと思えますが、いや、だからこそ、強く考えること、鋭く感じるが多かったという意味で豊穡な日々だったと考えます。

私の心は戦前の暗かった時が、戦時中の苛酷な時が、戦後の飢餓の時が、そして現在のいかがわしい時が流れるさまをじっと作曲室の窓から見て来ました。

音楽とは、作曲家の手を離れた日からは社会のもの、民族のものであり、誰のものでもあります。そして、当の曲を生んだ作曲家は、遠くから、自ら生んだ曲達が成長して行くさまを、或いは踏み潰されて死んで行くさまを、遥かな丘の上から見ていれば良いのです。それしか出来ず、又、してはいけないのです。

幸いにも生きていた曲、日本の海外の一流の演奏家の方達の胸の中に生きていた曲が、こうして全国21会場で並ぶことになりました。

どうぞ、音楽をお感じください。総べてのメッセージは、それぞれの音楽の中に込められて居ります。

(財) 神奈川芸術文化財団

芸術総監督 一柳 慧

財団法人神奈川芸術文化財団では西暦2000年という大きな時代の節目を迎え、20世紀を生きた日本の代表的な作曲家としてのみならず、指揮者、文筆家など、多分野にわたって活躍される團伊玖磨氏をとらえ、その軌跡の全貌をご紹介する事業「DAN YEAR 2000」を、團氏が活動の拠点とする神奈川を中心に全国で実施しています。

團伊玖磨氏の作曲家活動は昭和13年に歌曲やピアノ小曲集を発表して以来60年におよびます。子供のころに誰でも一度は歌ったことのある「ぞうさん」、美しい都会と自然美のメルヘンを歌った名曲「花の街」、そして北原白秋、萩原朔太郎らの詩に日本の詩情を美しく歌い上げた珠玉の歌曲集の数々。

不朽の名作としてすでに650回の上演回数を記録しているオペラ「夕鶴」。また、皇太子殿下のご成婚を祝して二度にわたって作曲された「祝典行進曲」、平成9年に開場した東京・新国立劇場のオープニングを飾った最新作のオペラ「建・TAKERU」など、團伊玖磨氏の数々の音楽が日本文化の歴史の節々で奏でられてきました。團伊玖磨氏の積極的な創作意欲と新鮮な芸術精神は、絶えることなく現在でも旺盛に続けられ、今回の「DAN YEAR 2000」の最終公演が歌曲集「マレー乙女の歌へる」の初演で飾られていることにもそれが象徴されています。

これまでの氏の軌跡を追いながら、その功績を再確認するとともに、戦後の音楽文化の再考になればと思います。

参加してくださる演奏家、団体の皆さまに心より御礼申し上げますと共に、皆さまが團音楽の真髄に触れる機会を共有していただければこのうえない喜びでございます。